

学生のレポートを通して見た「阿波学」における歩き遍路体験

久米 禎 子*

(キーワード：阿波学，歩き遍路，体験的学び，心理的成長)

1. はじめに

鳴門教育大学では2008年度より、歩き遍路を主体とした教養基礎科目「阿波学（地域文化研究）」（2単位、以下「阿波学」と略す）が学部授業として提供されている。授業担当者の専門領域は、歴史、地理、心理、英語、美術、体育など多岐にわたり、歩き遍路を共通基盤に、それぞれの専門領域を生かした教科横断型の授業を展開している（木原ら，2021）。

「阿波学」は講義と歩き遍路実習から構成されており、学生はまず、地域社会における遍路文化に関する基礎理解を、俳句（心理学）、地理、歴史などの講義を通して得た後、1泊2日で約40kmの行程を歩く、歩き遍路実習に参加する。授業担当者も歩き遍路実習に同行し、それぞれの専門性をふまえ、学生がさまざまな体験的学びを得られるよう工夫している。

表1に示すように、本授業の主たる目標は、四国の文化アイデンティティである遍路の体験的・実践的学びを通して地域や文化、伝統、自然などへの理解を深めることにあるが、そうした遍路文化の人文学的な理解の深まりに加え、「その文化を支えてきた地域社会や人々をまなざす視座、自己の振り返りや問い直しの姿勢、ともに歩く友人との助け合いや協調の意識など、人間形成的な意味におけるそれらの側面を涵養する契機となること」もねらいとしている（梶井ら，2011）。教育大学である本学の学生の多くは将来、学校や幼稚園の教員になることを目指している。今後の教育の担い手たちの人間的な資質を育むことも、教育大学における教育実践の重要な役割であると言える。

2008年度の本授業の立ち上げより10年以上が経過し、これまで、田村・南（2009）、梶井ら（2011）、皆川（2011）、皆川・佐々木（2014）、木原ら（2021）によって、道徳的意識や人間的成長、教科横断型授業などの観点から本授業の成果と課題が検討されてきたが、本授業を今後も継続していくにあたっては、さらに多角的な検討を加え、方法の洗練や内容の充実を図ることが不可欠

である。その際検討すべき点の一つとして、学生自身がどの程度主体的に本授業に取り組み、どのような学びを自ら得ているのか、ということがある。「阿波学」の大きな特色の一つは、学生が歩き遍路実習に参加し、実際に遍路道を歩くことで、座学で得た知識や理解を深めるとともに、座学だけでは得られない体験的学びを得る点にある。そこには学生の主体性や個性が大きく関わっており、そのありようが学びの質や量を大きく左右するため、学生の主体性を引き出し、学びを深める授業のあり方や内容を工夫することが非常に重要である。

そこで本稿では、本授業の課題レポートの記述から、学生の主体的な学びのありようを明らかにすることを通して、授業の成果と課題を検討し、授業改善の一助とすることを目的とする。分析にあたっては、教員の資質の涵養という点から、本授業をとおしての学生の心理的成長にも着目して検討を行う。

表1 「阿波学（地域文化研究）」2019年度シラバス

【目的】四国の文化アイデンティティたる遍路を体験的・実践的に学ぶことを通じ、地域理解を深め、その文化や伝統をまなざす態度や関心を養う。まず、講義により、遍路に関する基礎理解を形成する。遍路の歴史や文化、遍路と地域社会のかかわりなどについて知る。そして、実際に遍路道歩き、現地体験のなかで地域の伝統や自然を学ぶ。遍路を支えてきた地域の人々とも交流し、その営みの現状や課題を考察する。

【目標】講義により、地域社会における遍路文化に関する基礎理解を得る。歩き遍路実習により、遍路地域の文化や自然、遍路を支える人々の活動、自治体の取組などを直接知る。以上を通じ、教育や学校にたずさわろうとする者にとっての、地域文化を理解・尊重する基盤的態度・視座を形成する。

2. 分析対象および方法

本稿で分析対象とするのは、2018年度に提出された学生のレポート76本である。「阿波学」では、授業のしめくくりとして、歩き遍路実習終了後に、「歩き遍路の体験に基づき、遍路に関する考察を自由な形式でレポートにまとめる」という課題を出している。このレポート課題は非常に自由度が高く、それだけに学生の主体的な取り

*鳴門教育大学 人間教育専攻

組みの程度や、学びのありようが反映されやすいと考えられる。そうした点をふまえ、本稿では以下の2つの観点で分析を試みる。

まず〈分析1〉では、レポートの形式やテーマから学生の関心の所在や学びの内容を明らかにする。つづいて〈分析2〉では、レポートに記載された感想から、遍路体験およびレポート課題に取り組むことでどのような学びが得られたかを、学生の主観的体験に即して明らかにする。

3. 〈分析1〉 レポートの形式とテーマにみる学生の関心・学び

(1) レポートの形式

まず提出されたレポートを形式により分類してみたところ、a) 調査型、b) 体験記型、c) 制作・創造型、d) 考察型、の4つの型に集約できることがわかった(表2)。細かく見ればさまざまなヴァリエーションがあるが、すべてのレポートは、この4つの型のいずれか、もしくはその組み合わせであるとみなすことができる。それぞれの型の特徴について以下に述べる。

表2 レポートの形式

a) 調査型 (53名)	a-1. インターネットや書籍を使用したもの a-2. 自らが得たデータを使用したもの 例: インタビュー, 自分が計測した時間
b) 体験記型 (20名)	b-1. 時系列にそって体験を記述したもの b-2. 提示の仕方何らかの工夫があるもの 例: 小説風, 4コマ漫画
c) 制作・創造型 (5名)	
d) 考察型 (4名)	

a) 調査型

歩き遍路体験を通じて自分が興味を持ったテーマについて調べたものであり、全体の約7割にあたる53名がこの型に該当した。調べるツールはインターネットが大半であるが、書籍を用いた者も少数ながらいた。また、インタビューをしたり、歩行にかかった時間を計測するなどして自分が得たデータを使用したものもあった。調査テーマの具体的内容については、後の「(2)レポートの調査テーマ」の項で改めてくわしく述べる。

b) 体験記型

単なる感想文は除外し、具体的な体験的エピソードが描写されたもののみを体験記型とした。行程にそってできごとを記述したもの(7名)と、表現方法に何らかの工夫を加えて体験を記述したもの(13名)に大別できた。前者は札所ごとに体験や印象をつづったものが多く、写真入りのものもあった。後者には小説や新聞風(国語)、

4コマ漫画や絵(美術)で表現したものがあり、厳密にはb) 体験記型とc) 制作・創造型の混合形であるが、作品の域に達しているというよりは比較的体験を素直に記述したものが多く、b) 体験記型に分類した。

c) 制作・創造型

体験をふまえて別のテーマに展開させた制作物や、体験を作品に昇華したものである。前者には将来教職に就くことを想定した幼児向け絵本や指導案など、後者には美術コースの学生の写真や絵画作品があった。

d) 考察型

学生自身が何らかの問いを設定し、それについて考察しようとしたものも少数ながらあった。問いとしては「巡礼をすることによって人の心というのはどのように変化するのか」「なぜ人はお遍路をするのか」「なぜ八十八カ所あるのか」「世界遺産に登録されるメリット・デメリット」といったものであった。データに基づき、自分なりの仮説を立て、考えを提示しようとしたものもある一方で、考察の論理性や深まりという点では不十分なものもあった。

(2) レポートの調査テーマ

先述の「a) 調査型」のレポートについて、さらにテーマごとに分類・整理を試みたところ、表3のようになった。選ばれるテーマは、その学生の所属しているコースの専門性・特色と関連するものが多かった。以下に、テーマ別に内容を詳述する。

①**遍路の歴史・文化**: もっとも多く多くの学生が選択したテーマである。遍路の概説や各札所の由来、本尊などの説明が半数以上を占めたが、空海や精進料理、お接待等、興味を持った事柄についてさらに掘り下げて調べたものもあった。

②**歩き**: 「歩く」ことに関するものであるが、楽な歩き方・疲れない歩き方や疲労・痛み、その対処・回復法(体育)、歩きに適した食事・服装(家庭)や音楽(音楽)、歩く速度や予測時間(数学)など、所属するコースの特性を生かした切り口が特徴的であった。歩き遍路実習の前にリサーチした疲れにくい歩き方を実際に自分の体を使って検証したものもあった。

③**植物・自然**: 遍路道ぞいの自然(おもに植物)をテーマにしたものであり、理科コースの学生に多かった。

④**その他**: 上記以外のテーマとして、マーケティング・広告、外国人や子ども、障がい者の視点から見た遍路、

といったものがあつた。これらも、英語や幼児教育、特別支援といったコースの特性が反映されたテーマであつた。

表3 調査のテーマ

テーマ	数	
① 遍路の歴史・文化 (34名)	札所 (各札所の概説19, 仁王像1, 鐘楼門1)	21
	遍路の概説・由来	8
	遍路に関わる文化や歴史(空海4, 精進料理2, お接待2, 声明1, ご真言1, 御朱印1, 白衣1, 江戸時代のガイドブック1, 交通事情の変遷1, 数字と遍路1)	16
② 歩き (14名)	疲労・痛み(筋肉痛, 熱中症, 靴ずれ)6, 対処(ストレッチ, テーピング, ツボ押し)6, 疲れない歩き方4, 心拍数1, 適した音楽1, 食事1, 服装1, 歩いた速度1, 予測時間1	22
③ 植物・自然 (9名)	ヒガンバナ4, サトウキビ4, 柿1, 天気1	10
④ その他 (7名)	マーケティング・広告2, 外国人向け遍路2, 子ども向け遍路1, バリアフリーのツアー1, 遍路道沿いの文化1	7

注：表内の数字はのべ数

(3) 分析1の考察

レポートの形式とテーマの分析から、学生はそれぞれの所属コースの特性を生かして、多様な視点や切り口で遍路やその体験を捉えていることが明らかとなった。コースの特性という枠組みを導入することで、単なる感想ではなく、自分の興味・関心に即してより深く体験を掘り下げることが可能となっているように思われる。ただし、掘り下げる視点や深さは学生によってかなり幅があり、非常に着眼点がユニークであったり、表現に独自性があつたりするものがある一方で、通り一遍の調査や記述にとどまるものもあつた。レポートの形式や内容には、どの程度遍路文化に興味をもって主体的に取り組んだかが反映されていると考えられ、深く掘り下げたり、ユニークな視点でレポートを書いた学生は、自分なりの目的意識や課題意識を持って歩き遍路実習に参加していたことが、その記述からうかがわれた。

「d) 考察型」のレポートを書いた学生は少数であつたが、そこで立てられていた問いは、おそらく多くの学生が遍路に対して抱く疑問であり、本質的な問いでもあると思われる。しかしながら、これらのレポートにおいては、その疑問は十分に深められないまま終わっていたように感じられた。疑問を疑問のまま終わらせるのではなく、それを主体的な学びにどうつなげていくかが今後の課題であろう。また、歩き遍路という共通の体験をもとにしなが、それぞれの学生の関心や専攻というフィルターを通すことで、非常に多種多様なレポートに仕上がっていた。こうした視点の多様さは、自他の違いを知

り、自分の視点を相対化する契機となりうると考えられるが、現行の授業では他の学生が作成したレポートを読む機会はとくに設けていない。他コースの学生が作成したレポートを見る機会があれば、さらに学びが深まるかもしれない。

4. 〈分析2〉歩き遍路体験によって得られる学び

つづいて歩き遍路体験によって学生が主体的にどのような学びを得たのかを検討する。なお、体験は言語化によって整理されたり、深まったりする面があるため、ここでは「レポートを書く」という作業まで含んで一連の歩き遍路体験として考えることとする。

レポートのなかに「歩き遍路体験」もしくは「レポート課題に関する感想」を記載していたのは76名中63名であつた。そこで、まずこれらの記述を抽出し、意味のある最小限のまとまりごとに断片化してカードを作成した。それをKJ法で整理したものが図1である。

(1) 「歩く」という体験

感想において、「歩く」という体験に言及したものが非常に多かつた。自分の足を使って「歩く」ことは、学生にとって印象深く、記憶に残る体験であり、その体験を通して自分や他者、歴史、風土などについてさまざまなことを感じていたことがうかがわれた。

まず、この年の歩き遍路実習は雨天のなか行われたこともあり、【歩く大変さ】についての記述が多かつた。体力に自信のある学生でも、実際に歩いてみると想像以上に大変だったようである。しかしながら、身体的な疲労や苦痛が大きいからこそ、仲間との【助け合い・協力】が生まれ、【人のぬくもり・ありがたさ】がいつそう感じられたようである。また、大変さを乗り越えることで【達成感】や【成長】が得られたという者もいた。さらに、仲間と助け合うことで得られる【協力による達成感】は、自分ひとりで成し遂げるのとはまた違った感動や充実感をもたらすものであつた。

「歩く」ことは身体的疲労だけでなく、視点の変化ももたらしていた。ふだんは車で通り過ぎてしまうようなところを自分の足で時間をかけて歩き、自分の五感を使って能動的にさまざまなものを見、触れ、味わうことで、思ってもみなかった出会いや気づきが得られたようである。このような【歩くことで得られるもの】の一つに、お遍路さんや地域の方など普段接する機会のない他者との出会いがあつた。こうした他者との【ふれあい】は、ふだん家族や友人など狭い範囲に限定された人間関係のなかにいる学生にとって、より広い視野で自他の関係を捉えるきっかけとなりうると考えられる。

出会いには、札所やお勤めなどで【歴史・伝統】を体

注：() 内の数字はカードの数

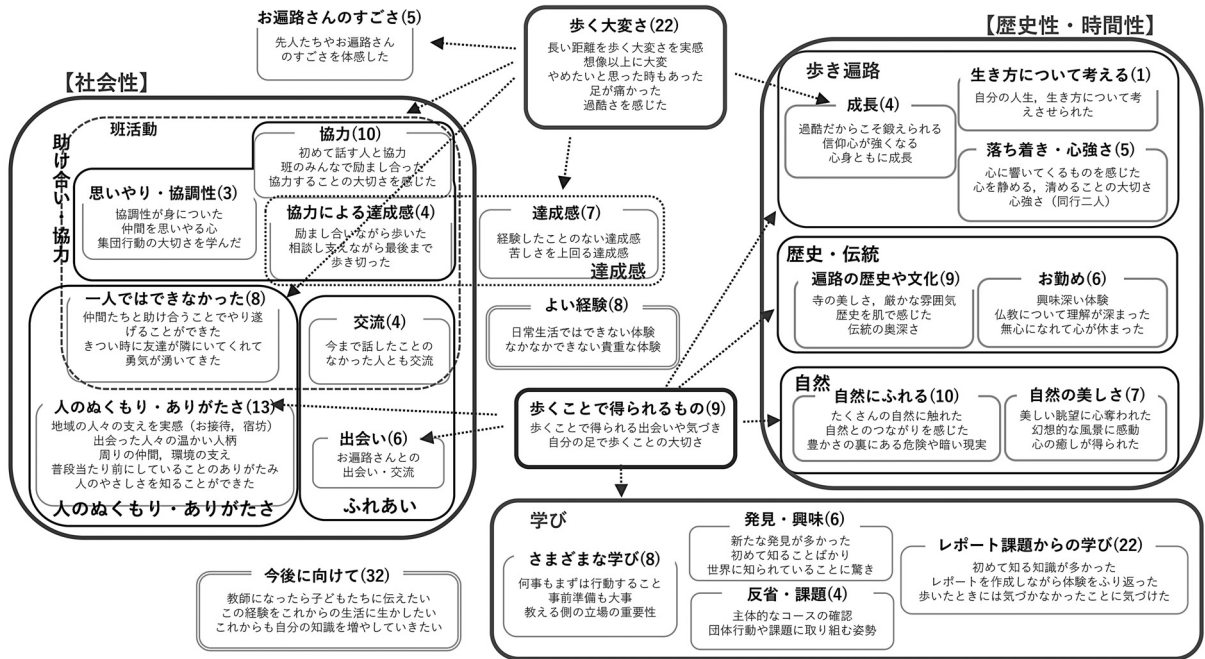


図1 レポートに記述された感想のKJ図

感したり、遍路道で【自然】にふれたりするなど、人間以外のものとの出会いも含まれていた。これらの記述の中には、「物珍しい体験」というレベルにとどまらず、感動を伴ったり、自分を越えた超越的なものの存在を感じ取るなど、自分の心が深く動かされる体験をしているものも多くあった。また、一連の【遍路歩き】の体験を通して自分自身について考え、内省が深まったり、心の安らぎを感じたというものもあった。このような、自分の心を見つめたり、自分の心が動かされる体験は、新たな「自分」と出会う体験であったとも言える。

(2) 歩き遍路と「自分さがし」

青年期は従来、「自分さがし」の時期、すなわち「自分は何か」を問い、「これが自分だ」というアイデンティティの感覚を獲得する時期だと言われてきた。自分という存在がわかるためには、自分とは独立して存在する他者や世界に関わり、その中に自己を定位することが必要である(高垣, 1999)。アイデンティティとは「過去から現在、そして未来へと進む時間軸(縦軸)と、仲間や社会との関係性に関わる空間軸(横軸)とが切り結ぶ交点に、自分自身が定位されたときに獲得される『これこそが自分だ!』という感覚」(伊藤, 2006)のことである。

歩き遍路実習において、仲間と助け合ったり、人と出会い、ふれあう体験は、他者や社会とのつながりを認識し、その中に自分をどう位置づけていくかという【社会性】の課題に関わっている。また、自分につながる歴史を知り、自分自身に向き合い、自分や世界の未来を考え

ることは、【歴史性・時間性】の中に自分を位置づけることである。ここに自分を越えた存在を認識すること、広い意味での宗教的体験が含まれていることは重要である。河合(1983)が指摘するように、「己を超える存在の認識」は、大人になることの基礎として必要なものであり、自分の意志では完全にコントロールできない「自分」という存在を自分のこととして引き受ける覚悟をもつことが、子どもから大人への視点の転換につながると考えられる。このように考えると、歩き遍路実習には「個」と「関係」の二つの側面の成長・成熟の契機が含まれ、青年期にある学生にとっては非常に発達促進的な意味を持つ体験であると考えられる。

さらに、臨床心理学的に見て歩き遍路実習の学びがとりわけ重要なのは、それらが体験を伴ったものであるという点にある。ふだんヴァーチャルなものに囲まれ生活している学生にとって、歩き遍路は否応なしに「現実」に直面させられる体験である。自分の身体的・精神的限界に直面し、ふだんは隠している弱い部分を仲間に見せてしまうこともありうる。しかし、こうした一見ネガティブな状況は、自分について新たな気づきをもたらす可能性を秘めている。たとえば、困難な状況を自分の力で乗り越えることで自信につながったり、仲間を受け入れてもらうことで安心感が得られたり、自尊心が高まったりする。また、自分の五感を使うことで得られる印象や体験は、受動的に入ってくる情報とは異なり、心を揺さぶり、自分を内側から変化させるほどのインパクトをもつ。このように、主体的に現実とぶつかる体験は確かな手ごたえのある体験であり、こうした現実との格闘の中で、

「他者・社会・世界に出会い、それを鏡にして客観的に自己を見ることが出来る」(高垣, 1999) ようになるのである。心理的・人格的成長という文脈において、歩き遍路体験は学生にとって他に代え難い貴重な体験であると考えられる。

5. おわりに —レポートを書くということ—

学生は歩き遍路においてさまざまな体験的学びを得ているが、レポート課題に取り組むことで、その学びはさらに深まると考えられる。〈分析1〉で見たように、学生はそれぞれの所属コースの特性を生かして、多様な視点や切り口で遍路体験をふり返り、レポートにまとめている。そのような「ふり返る」という行為自体が、内省を促し、体験をより深めるものとなっていることが〈分析2〉において明らかになった。歩き遍路はその後のレポート課題も含めて、自分さがしの契機を豊かにもつ手ごたえのある体験であり、個の確立や関係性の成熟といった心理的成長につながっていくものだと考えられる。これは、本授業の重要な意義であると言える。

その一方で、体験したことが気づきや学びとして十分深められているとは言えない学生もいることも明らかとなった。学生がより主体的、積極的に遍路体験から学ぶためには、歩き遍路実習に参加するにあたって自分なりの目的意識を持つことや、疑問を疑問のまま終わらせず深めていくことが必要である。そのためには教員のサポートや学生の内省力を高める取り組みも重要であろう。また、歩き遍路体験によって得た気づきを他の学生と共有することは、視野を広げ、自分を知り、さらに学びを深める契機となると考えられ、そうした新たな工夫を加えていくことも今後の課題である。

文献

- 伊藤美奈子 思春期・青年期の意味 (伊藤美奈子編 思春期・青年期臨床心理学 朝倉書店, p.7, 2006)
- 梶井一暁・大石雅章・木原資裕・久米禎子・立岡裕士・内藤隆・中津郁子・町田哲・皆川直凡・南隆尚・山本準・山根秀憲 学生教育における四国遍路歩き体験授業の意義と課題—「阿波学」の試み— 鳴門教育大学授業実践研究, 10, pp.3 - 9, 2011
- 河合隼雄 大人になることのむずかしさ 岩波書店, p.26, 1983
- 木原資裕・皆川直凡・立岡裕士・薮下克彦・内藤隆・田村隆宏・南隆尚・町田哲・久米禎子・眞野美穂・畠山輝雄・小倉正義 歩き遍路を主体とした鳴門教育大学「阿波学」における教科横断型授業の展開 鳴門教育大学研究紀要, 36, pp.334 - 348, 2021

皆川直凡 心理学からみた歩き遍路体験, その人間形成的意義—学生による創作俳句の内省・説明文と鑑賞文の分析から—, 鳴門教育大学研究紀要, 26, pp.35 - 42, 2011

皆川直凡・佐々木智美 歩き遍路体験に伴う感動が人間の成長に及ぼす影響—学生による創作俳句600句に詠み込まれた情景と心情の分析から—, 鳴門教育大学研究紀要, 29, pp.1 - 14, 2014

高垣忠一郎 「自分さがし」への道案内 (心理科学研究会編 新・かたりあう青年心理学 青木書店, pp.68 - 78, 1999)

田村隆宏・南隆尚 大学院生の道徳的意識に及ぼす遍路体験の影響, 教育実践学論集, 10, pp.81 - 88, 2009